特　別　寄　稿

名寄市立総合病院に想う

上川北部医師会々長　**中　村　　稔**

私が名寄市立総合病院の３代目整形外科医長として赴任したのは昭和35年６月１日である。私は美深町で生れ育ち，旧制名寄中学４修から北大予科，そして医学部と。実に12年ぶりのユーターンであった。広い大通りと静かなたたづまい，そして西５丁目の角に，明治の文豪徳冨盧花が〝みゝずのたわごと〟であれたあの冨士屋ホテル。私もとうとう帰ってきたのか，と本当に懐かしかった。市立総合病院までの街並はすっかりよくなっていたし，病院の北側に住宅街が拡がっているのを見た時，初めて名寄も変わったなあ，と実感した。

それにしても総合病院とは思えない老朽化した建物であった。戦前の町立社会病院は立派な建造物だったが，私が中学生の時に罹災した。丁度，英語の試験中だったが，誰かが，〝社会病院が焼えているぞ〟。試験は中止，旧名中（現在の工業高校の所）と市立病院の間は殆ど家もなく，カタ雪を歩いて名中生がぞろぞろ野次馬よろしく火事を見に行ったのである。当然その日の授業は中止，良き時代であった。

実際に診療する様になって又驚いた。上水道はなく，廊下の所々は腐り，そこから暖房の蒸気が吹き出しているのである。住宅も古く寒く，名寄はこんなに寒い所だったのか，と改めて感じた。しかし職員や近隣の人達は皆心暖かく，又各科の一人医長達は３～４年の間に赴任した者ばかりで年代も近く，お互い相談したり協力しながら診療に従事することが出来たのは，本当によかったと思っている。

そんな時，昭和37年，病院の改築が成ったのである。一同感激した。従来は詰所も１つ，混合病棟だったが，整形外科も４階病棟と６階の混合病棟を使っての診療が可能になったのである。内科は２人医長と研修医，精神科は研修医と２人制になったが他は相変わらずの１人医長制。手術の時には，菊地完先生に随分手伝って頂いたし，私も外科の手術をお手伝いすることもあった。

改築された病院で初めて医局と会議室が造られた。当時の内科医長大西慎二先生と，〝この機会に開業医の諸先生を含めた医師研修会をしたらどうだろうか〟ということになり医局に計り，偶々，上川北部医師会長佐藤真幸先生が腰痛で入院されていたのでその旨お話しすると，〝それはよいことだ。すぐやりなさい。それでまとまったら雑誌発刊の費用は医師会が持つから〟と。こうして初めて上川北部医師会雑誌が発刊されたのである。その後自然消滅したのは誠に残念である。

今改築なり，各科の諸先生や，パラ・コメディカルスタッフがセンター病院の役割を果すべく皆努力されている時，又病院誌も２号目を迎える今，上川北部医師会雑誌の再発刊を，市立総合病院のスタッフに心よりお願いしたいのである。